

阿嘉島の鳥 Part3

サシバとオオミズナギドリの受難

上林利寛
AMSL 調理担当

Birds in Akajima Island, Part 3:

Misfortunes occurred for the grey-faced buzzard, *Butastur indicus* and the streaked shearwater, *Calonectris leucomelas*

T. Kamibayashi
E-mail: kamibayashi@amsl.or.jp

今年の冬の厳しい寒さは全国的なものようで、阿嘉島も年末からとても冷え込んでいました。寒空の下、研究所の4階のベランダから畑を見渡すと、島に飛来した冬鳥達の数は去年に比べ多く感じます。特にツグミ科のシロハラの数が多く、研究所に迷い込んだ1羽のシロハラはガラス戸にぶつかってしまったのか、しばらく動けなくなっていました。

阿嘉島で観察できる冬鳥の代表と言えばワシ・タカの仲間のサシバです。今期は去年(2010年)の10月13日に30羽程度の鷹柱を観察したのが最初でした。以降、2回程、阿嘉島上空を数十羽の群れで移動するのを目撃しました。これらの群れは阿嘉島より、さらに暖かい南の島々を目指して飛んで行ったのでしょうか。渡りを観察して数日経った秋晴れのある日、研究所のそばの見晴らしのよい松の木に、2羽のサシバが止まって頻りに「ピクィー」と甲高い声で鳴きあっていました。しかし、そういった行動は直ぐにカラス(リュウキュウハシブトガラス)の目にとまってしまい、2羽のカラスが追い立てるようにこのサ

シバ達に向かって行きました。サシバ達は、少しの移動を繰り返して、カラスの攻撃をかわしながら持ちこたえていたのですが、やがて研究所の裏山上空に消えて行きました。猛禽類の仲間がカラスごときに虐められる?と思われるかもしれませんが、実は体はカラスの方が一回り大きいのです。それに、サシバに比べカラスのクチバシは大きく頑丈なので、突かれでもしたら大きなダメージを受けてしまうでしょう。この初お目見え以降、幾度となく研究所のそばで2羽のサシバを目にするようになりました。当初、しきりに鳴いていたサシバ達も、枝で羽を休めている時はあまり鳴かなくなりました。カラスに気付かれることを学んだのでしょうか?しかしながら、これらのサシバが同じ個体だったか否かは定かではありません。

頻りにサシバ達を見かけるようになって1ヶ月近く経ったある日の朝、島の人に保護された1羽の海鳥が研究所に持ち込まれました。この海鳥は、普段は沖合の海上で見られるオオミズナギドリです。事情を聞いてみると、複数のカラスに追いかけられてアパート



写真1 飼育室のガラス戸に衝突したのでしょうか? 出入り口の下で動かないシロハラ (撮影日: 2010/12/24)



写真2 松の木にとまり、にらみあうカラスとサシバ (撮影日: 2010/10/21)



写真3 研究所近くの電線にとまる2羽のサシバ(撮影日:2010/12/28)
この日は朝から、けたたましく鳴き合っていました。サシバの越冬個体は「ウティダカ(落ち鷹)」と呼ばれています。

の敷地に迷い込んで来たそうです。そして、保護した後、翼に外傷がないことを確かめてから学校の校庭で放鳥を試みたそうですが、上手く飛べなかったそうです。研究所で預かってから、直ぐにインターネットでミズナギドリ類の放鳥について調べました。あるサイトによると、平地での放鳥では風をとらえることが上手く出来ないため、飛び立つことは難しいとのことでした。その時、私は以前、動物番組で見たミズナギドリ的一种が海面から飛び立つシーンを思い浮かべました。それは、海面上で助走をつけながら羽ばたいて飛び立つ光景です。そういう訳で、オオミズナギドリを放ってやるためには海に近い砂浜が適していると考え、カラス達の活動が鈍くなる夕暮れを待ち、集落近くのヒズシ浜で放鳥することにしました。

浜まで移動するために、オオミズナギドリが暴れぬよう巾着袋を頭に被せ、ペット用のキャリーケースに入れました。その際に、クチバシで手を突かれないように厚手の手袋を着用したのですが、暴れる気配は無く、おとなしくスムーズにケースの中に入ってくれました。ヒズシ浜に到着してからは、波打ち際から2～



写真4 保護されたオオミズナギドリ(撮影日:2010/11/9)

3メートルくらいの砂浜にケースを置き、静かにケースの扉を開けて頭を覆った袋をとってやりました。すると、オオミズナギドリは目の前に広がる海をみて安心したのか、大きく伸びをするかのように翼を数回羽ばたいて見せました。それから別れを惜しむ間もなく、助走をつけ海面を滑るように羽ばたきながら、夕陽が暮れる沖の海上に飛び去って行きました。

後日、研究員にこのことを報告すると、保護された前日に、集落近くのビーチの海上を飛ぶ見慣れない鳥を目撃していたそうです。もしかすると、このオオミズナギドリだったのかもしれませんが。不用意に島に近付きすぎたためカラス達に追いかけられたのでしょうか？

この原稿を書き終えるころ、研究所の上空を1羽のサシバが「ピクィー」と鳴きながら通り過ぎて行きました。「鳴かなければカラスに気付かれないよ」と、そのサシバを見上げ私はつぶやきました。やがて、暖かくなり北上の始まる3月下旬までは、サシバ達の飛び交う姿が見られるでしょう。